

第23回学習会を、平成22年8月20日(金)19:00～20:00福岡市教育センターにて行いましたので報告いたします。

## 第23回目の内容

講師 重枝一郎先生(福岡市教育センター主任指導主事)

- 1 学習規律とは
- 2 リーダー性を育むとは
- 3 エクササイズ(「組織」を動かすGWT)の体験活動



## ○学習規律とは

授業における3つの指導対象

1 学習内容 2 学習方法 3 学習規律



1時間の授業において、この3つを指導しなくてはならない

## 学 習 規 律

- ①チャイム席
- ②忘れ物
- ③構え(ゾーン)
- ④号令

学年の初めに  
実現する項目

- ⑤注目して聴く
- ⑥発表できる
- ⑦黒板での発表もできる
- ⑧ペアやグループでの話し合いができる

言語コミュニケーション  
にかかわる約束事は  
積み上げの



「厳しい」から「心地よい」ものになるように実現させていく

## 3つの学力

内容学力 (テストの点数)      方法学力 (思考・判断・表現)      規律学力 (主体的に学ぼうとする態度)

↓  
生徒と目標を共有

学力とは何か・・・「学力」は一意的に捉えられない

【現在の考え方】①学習して身に付けた能力 ②学ぼうとする力(エネルギー)

学ぼうとする力・学んでいく力・学んだ力(河野重男)

【基礎学力】①問題解決の能力 ②読み・書き・計算の能力(技能)

学ぼうとする力：意志・意欲・態度      学んでいく力：方法・技能      学んだ力：知識・理解・技能

## ◎夏期校内研修の講師、30校！！



重枝先生はこの夏、30校の小中学校で夏期校内研修の講師を務められています。福岡市はもちろん、近隣地域の学校、PTA主催の講演にも呼ばれています。それだけの求めがあるのはもちろん、重枝先生のお人柄や独特の言い回し（重枝節！）の魅力もあるのですが、まず重枝先生の「絶えざる自己研鑽」の姿勢があるからこそだと思います。それは、「エネルギー（知的体力）」があるからだだと思います。「学ぼうとする力（エネルギー）」が人一倍、大きいのでしょう。

「学ぼうとするエネルギー」が強いので、パラパラと本をめくったり、大学の先生の話をちょっと聞いたりした時に、（重枝先生の場合、「パラパラ」や「ちょっと」がポイントです！！）その話を必ず、自分の「脳」をくぐらせて「重枝流」に「定義」するのです。自分の考え方として「筋」を通すのです。重枝先生の今までの「体験」や「理論」にかぶせていたり、関連付けていくのです。そうやって「重枝理論」が生まれます。それを「風土会」でも紹介しています。

「学ぼうとする力（エネルギー）」が高いのは、風土会に集う先生方も同じだと感じます。今回は夏休み中にもかかわらず、もしかしたら、昼間も校内研修があったにもかかわらず、夜、福岡市教育センターまで足を運んで下さる、そのエネルギーはまさに、「学ぼうとする力」です。そのような先生がいる「学校」、そのような先生と出会う「子ども」には、必ずその「エネルギー」が伝染していきます。

そうやって、学校や子どもが「元気！」になることが、この「風土会」の存在意義です。

## ◎学習規律

学習規律については、学年の最初に子どもと「契約を結ぶ」活動を仕組みます。子どもは、授業で教師が教えることは、「学習内容」だけだと思っているかもしれませんが、しかし、教師は3つのことを教える、子どもたちは3つのことを学んだと「定義づけ」しておけば、子どももそれを受け入れることができます。

授業で指導することは、  
 ①学習内容  
 ②学習方法  
 ③学習規律 の3本立てで、



人間形成上この3つを学ぶ必要があるんだということを、最初に子どもの意識に強く入れ込んでおくのです。

まず、学習規律を守ることが絶対必要なんだと、子どもと契約を結びます。つまり、約束させるということです。授業が始まる前にチャイム席を守って、学習用具を準備して、構えをつくっておくこと（ゾーン）。リーダーの号令で授業が始まるという、この一連の流れを約束します。

次は、「注目して聴く」「自分の考えを発表する、説明する」「場合によっては、前に出て黒板での発表をする」「ペアやグループで話し合いができる」「自分たちの考えを比較、統合するような交流活動ができる」などを、教師が「場を設定」しながら子どもに「積み上げ」させていきます。つまり、教師が責任をもって「できるようにしていく」ということを子どもと確認します。

このように、子どもと教師と一緒に、目標を共有するのです。このようにして、教師は「学習規律」を教えるし、子どもは学びます。そのうちに、子どもが「学級の実力」として「学習規律」を意識するようになります。

つまり、子どもに「学習規律が守れる」＝「学級の実力」という意識をもたせるように、教師は働きかけるのです。

## ◎交流活動の設定

「自分の考えを発表，説明」し，「自分たちの考えを比較，統合するような交流活動」を教師が設定することは，子どもの「思考を促す」ために，重要なことです。

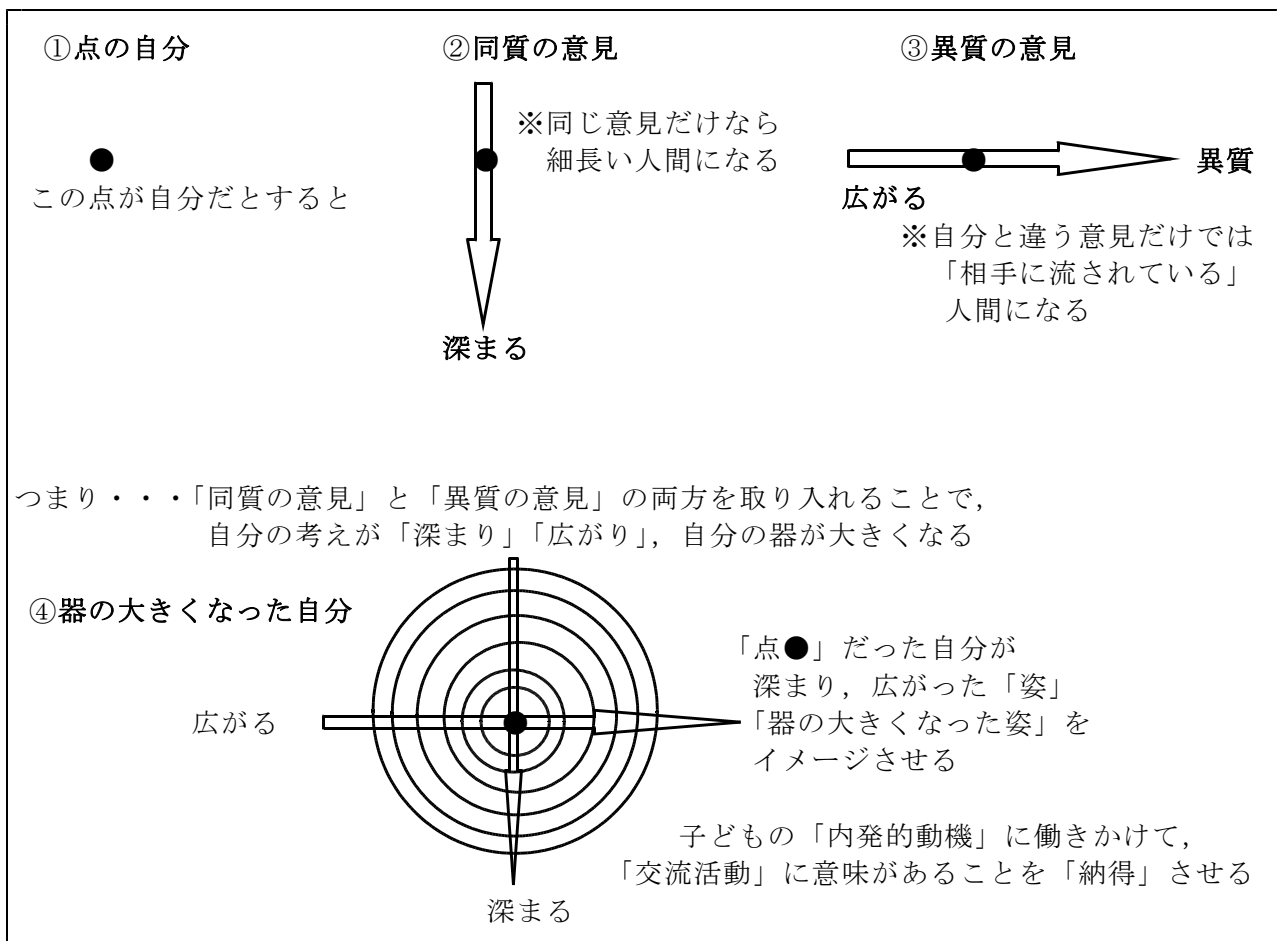
「講義形式」の授業は，一見，学習規律が守られている，よい授業に見えますが，子どもの表情を見ると，「思考がとまっている」ことがあります。顔は上がっているけれど，授業とは違うことを考えている，ぼんやりしているなどなど……。

そこに，少しでも「意見交換」できる交流活動を入れると，子どもの思考が活性化されるのです。

しかし，それをすることで「学習規律」が崩れることを，教師側が恐れているのかもしれませんが。教師がちょっと冒険，勇気を出して，日常的に行わないと，交流はできません。

自分の意見と違う人の意見を聴くことは，足し算になるので，深く学ぶことになります。自分の考えが，深まり，広がります。それが，「賢くなる」ということだと，子どもに感じさせるのです。「自分の意見も言わない。人の話も聴かない」では，自分という人間が，深まりも広がりもしない。つまり「点」だということだと，下図を用いて，子どもに納得させることも，場合によっては有効です。

「交流」することの意義を，子どもに感じさせることで，「交流活動」が意味のある時間になっていくのです。



「規律学力」とは，主体的に学ぼうとする態度（エネルギー）です。

『授業をする＝学力（内容学力・方法学力・規律学力）を身につけさせる』

ということ，教師が常に意識しておくことで，子どもにも意識させることができるのです。

## ◎「第1の矢」「第2の矢」

「第1の矢」：理論的な背景（考え方，土台，背景）

「第2の矢」：あたりまえの発言，お決まりの文句



子どもを「納得」させるためには，最初に「第1の矢」を放っておくと，「第2の矢」が素直に入ります。

例えば，「チャイムを守りましょう」は「第2の矢」です。子どもの本音としては「また，どうせ，うるさいなあ・・・」と感じており，強制性がなくなり，反発することもあります。

ここで，「第1の矢」を放っておくと，教師に「勢力」を感じるようになります。

※「教師の勢力資源」とは，子どもが教師に感じている「従う理由」です。

中学生が感じている教師の勢力資源は，「教師の人間的な魅力」「教師役割の魅力」「罰・強制性」です。詳しくは，会報22号を参照してください。

例えば・・・・〈「第1の矢」具体例①〉

「楽しいクラスにしたい」これは，あたりまえです。

これを「第2の矢」にするために，「第1の矢」として話す内容は・・・

「教室」ってね（※「クラス」，「職員室」でも同じく），ある種の「閉鎖空間」だよね。

「閉鎖空間」：ストレスが徐々にたまっていく空間と定義しておきます。

これは，ハツカネズミの実験で，証明されていることです。

ある空間に，ハツカネズミを閉じ込めていると，ストレスがたまって，殺し合うのです。これは，人間も同じです。

教室という「閉鎖空間」で「毒」を吐くと，息苦しくて生活できなくなります。

ここでいう「毒」は，「暴言」や「先生の怒鳴る声」等です。

授業中に大きな声を出すこと（大きな声で先生を呼んだり，友だちを呼ぶこと）も，ストレスに感じます。

心地よい空間にするためには，「心理的酸素」が必要です。

「心理的酸素」：キーワードにします。

人とのかかわり方です。話し方や聴き方。

人とのかかわりかたを意識することで，「楽しいクラス」になるのです。

「何のために教室（職員室）に来るの？」

必要がないなら，集まらなくていいのです。勉強だって，家ですればいいのですから。

（教室に集まる意味は？ 職員室に教師が集まる意味は？）

お互いに学びあって，認め合うから，意味があるのです。

つまり，クラス（職員室）は，そのままにしておいたら「閉鎖空間」なのだから，必要な「心理的酸素」を入れるために，「人とのかかわりかた」を考え，身につける必要があること。その結果，お互いが学び合い，認め合える「楽しいクラス」になること（※「第2の矢」）を伝えるのです。

このように，「第1の矢」で子どもを「納得」させて，「第2の矢」については，「具体的に教える」ことが大切です。これが，子どもと「目標を共有」することにつながります。

目標は，日常的なトレーニングで，積み上げ的に身につけていきます。

日常的に想起させるのは，「第1の矢」の話です。だから！！・・・（共有した目標）を確認して，トレーニングの積み重ねを行います。

〈「第1の矢」具体例②〉

幼児が砂浜で、山を作っている情景をイメージしてみましょう。のどかな風景です。  
子どもがチラッとお母さんを見ます。  
お母さんも、こっちを見ていたら、幼児は安心して、山を作り続けます。  
でも、お母さんが、別の方を見ていたとします。自分のことを見ていなかったとします。  
幼児はどうするでしょうか？

いきなり、作っていた山を崩し始めるかもしれません。  
お母さんの気をひこうと、大声を出し始めるかもしれません。

「視線」がなければ、安心して生活できないのです：定義付けます  
「心理的酸素」に「視線」を含めます。

だから、  
人が「発表」するときには、その人の方を見ることが大切なのです（※第2の矢）。  
誰も発表者を見ていないと、不安になって、先生の方ばかり見る発表者がいるでしょう？  
先生まで、他の方を見ていたら、苦しくてたまりません。そんな教室は「不安」です。  
「発表する人を見る」＝支持的風土づくりなのです。

このように、授業にかぶせていくことが重要です。

一日の大半は「授業」です。  
授業の中で、人とのかかわり方などを、「アウトプット」させていかないと、定着する機会が減ることになります。

人とのかかわり方（ソーシャルスキル・トレーニング）は、授業と特別活動をオーバーラップさせていくことで、定着度が増すのです。  
GWTのような「話し合い」を「授業中の活動」にも取り入れていくという発想が、「授業中に交流活動を取り入れる」ということにつながります。  
このように、子どもの思考を活性化する活動を、さまざまに仕組んでいくのです。

## ○リーダーについて

リーダー { 卓越性（個人的特性）  
          { 代表性（皆と同じ、たまたまその力が人望に押されて表に出る）

$$\boxed{\text{リーダー} = \text{個人の特性} + \text{人望}}$$



代表性リーダー

- ①フォロワーのことを考えながら行動する（協調主義的）
- ②皆の代表（集団主義的）
- ③たまたま少しばかり抜き出ている、その点を含めて人望があったから（平和主義的）

## ※リーダー性を育むためには・・・

↓  
リーダーとしての経験，フォロアーとしての経験をともに柔軟な形でさせる  
よいリーダーを育てるには，よいフォロアー経験が必要である  
また，逆も不可欠  
↓  
リーダー性の問題は，集団の一員としての実感をもたせることが重要  
↓  
GWT 活用



### 解 説

「最近では、リーダーになれる子どもがいないね」と愚痴をこぼす先生は、実は自分が、フォロアータイプであることが多いのでは？逆に、リーダー的教師は、生徒にフォロアーを求める傾向があるのでは？リーダーとフォロアーには、そのように、「関係」があるのでは？と感じているのですが、いかがでしょうか？

日本の教育活動の中では、「卓越したリーダー育成」は行っていません。卓越性のあるリーダーは、「すごい」けれど、「自分の考えと違うものを排除する」面もあるかもしれません。

実際の教育活動でこだわっていることは、リーダーとは、「みんなのことを考えているか」ということです。つまり、「リーダー = 個人の特性 + 人望」です。

一番大切なことは、集団の一員としての実感をもたせることであり、そのためには、時にリーダー、時にフォロアーという、両方を経験させることが必要になってきます。

小・中学校のリーダー育成では、「すごい能力」は必要ではなく、「関係性を自覚」させれば、それでOKなのです。

### エクササイズの体験活動

## 「組織を動かす」GWT

5人組で行うエクササイズです。

リーダーが先頭で、4人がメンバーです。

(右写真1)のように、全員が前を向いています。  
しゃべることはできません。コミュニケーションは「付箋紙」  
に書いたものを交換するだけです。前の人の肩をたたいて、  
付箋紙を渡します。

つまり、前後でのコミュニケーションしかできません。

ゲームの内容は何も明かさずに、先頭の「リーダー」が  
重枝先生のところに集合し、指示を聞きます。

そこで、2種類の「指示書」を渡されます。リーダー用と  
メンバー用です。

トランプも、一人に4枚ずつ、配布されます。



→リーダーに配布された「カード」  
メンバーには、違うカードが渡されます。

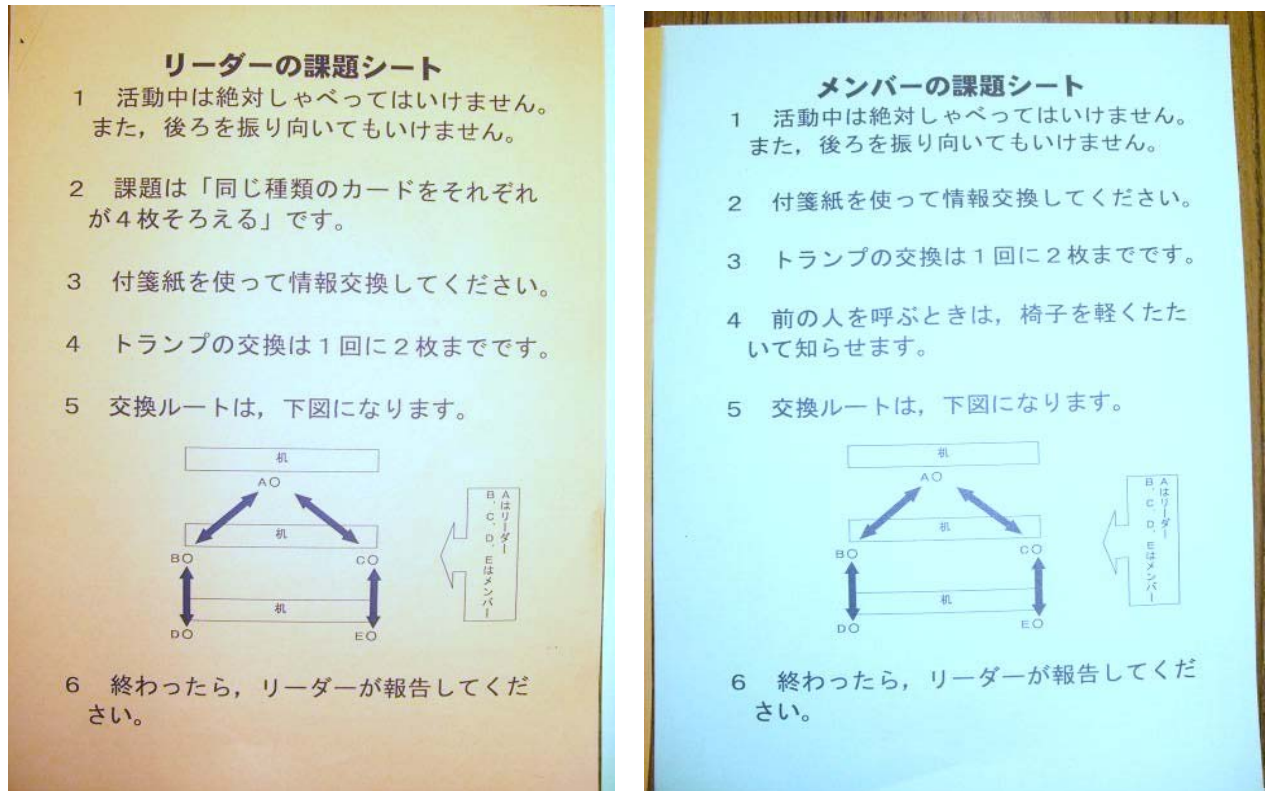
(写真1)



リーダーは「リーダーの課題シート」を、メンバーは「メンバーの課題シート」を読んで、ゲーム開始です。(下写真2)の課題シートを較べてみると、すぐにわかるのですが、リーダーしか、「同じ種類のカードを4枚そろえる」という目標を知らないのです。

メンバーは、いったい何をすればよいのか見当もつかないままゲーム開始となり、戸惑っているうちに、時間が流れていきます。何をすればよいかわからないと(つまり、目標がわからないことに)イライラするゲームです。

(写真2)



じっとしていてもしょうがないので、とりあえず、自分もっているカードを「付箋紙」に書き、前の人に渡します。すると、前の人からも、情報が入ってきます。

リーダーは(写真3)のカードをもっているのです、そろえる「同じカード」とは「K」だと考えます。

しかし、本当は、「ハート」や「スペード」などのマークをそろえることが正解です。そのことは、「リーダー」が、情報を集めないとわからないのです。

つまりこのゲームは、「組織的に動く」ために必要なことを教えてくれるゲームです。

「組織」に大切なことは、「情報の共有」「目標の共有」です。また、このゲームでは、まずリーダーのカードが4枚集まるのではなく、末端が最初に必要な必要があります。末端ができれば、順にすべてが完成するのです。つまり、末端の人(わからない人)のレベルで、みんなで進めていくことが重要であることを、示唆しています。さらに、このゲームのルールではできないのですが、横の連携が可能であれば、もっとスムーズに情報の共有が進みます。

このように、「組織」にとって大切なことを、体験的に教えてくれるGWTです。ぜひ「職員研修」で取り組むことを、お勧めします。



(写真3)

※「福岡市教育センター」2階の教材コーナーに、「風土会」で紹介したエクササイズ教材を置いています。1週間の貸し出し可能ですので、ぜひご利用ください。

☆ 今回の学習会のキーワード ☆

- 授業における3つの指導対象：①学習内容②学習方法③学習規律
- 3つの学力：内容学力・方法学力・規律学力
- 学習規律が守れる＝学級の実力
- リーダー＝個人の特性＋人望
- 「閉鎖空間」「心理的酸素」



♪学習会に参加された先生方の感想♪ (参加人数 15名)

- ・目標を共有することは大切だと思います。子どもと教師が同じ目標に向かっていくためには、その意味も共有しないとイケない……。  
エクササイズもとてもためになりました。組織の構図がそこにあります。このようなエクササイズを通して、「組織の大切さ」を子どもと共有し、意味あるものにしたい。子どもの心にもすんなり、組織の大切さが理解できると思いました。
- ・学習規律を育てていくのは本当に難しく、1学期は各クラスで小言ばかりを言っていて、疲れ果てていました……。でも、当たり前にするべきことをストレートに第2の矢を放っていただけなんだということを知り、目からウロコの思いです。子どもに理論を伝えるというのは、こういうことなんだと実感しました。エクササイズは難しい！リーダーがリーダーシップを発揮するには、やっぱりメンバーシップが大切だと、改めて思いました。2学期、理論も子どもたちに伝えるとともに、それを日常にまで活かせるような活動を工夫していきたいと思います。2学期は生徒会改選もあり、リーダー選出が滞っているのが悩みです。今日学んだ理論をもとに、生徒たちに声かけをしていきたいと思っています。
- ・当り前のことを第2の矢にして第1の矢をまずは放つ！この味付けが大事だと思った。気づきの大切さが大事だと改めて思った。
- ・受け持っている学年やクラスにリーダーがいらないと思い、どうやってリーダーを育てていけばいいのか考えていました。今日の話では、リーダーを育てるにはフォロアーの大切さ、フォロアーを育てるにはリーダーの大切さだということで、生徒にそれぞれを経験させないと育つはずはないということに気づかされました。様々なGWTを通して経験させることが生徒に新たな一面に気づかせて、持っている力を発揮させる場になると思いました。
- ・「組織を動かす」エクササイズがとてもよかった。組織に必要なことがよくわかりました。理論も2学期からすぐに使おうと思います。「授業と特別活動のオーバーラップ」それから「3つの学力」については、学校現場で研修する中で疑問になっていたことが解決できたような気がします。
- ・今回、初めて参加させていただきました。貴重な体験をさせてもらい感激です。「閉鎖空間の話」「第1の矢」4月から職場が変わり、大人にも子どもに対してもいつも感じていたことを整理してお話しして下さり、ビックリ！！です。
- ・夏休みは「風土会の会報」をじ〜っくり読みました。忘れていたものもあり、またまた勉強になりました。夏休みバンザイ！「組織を動かす」エクササイズ、おもしろかったです。必死にあせってやりました。早速、校内研修でやってみまーす！！
- ・「第1の矢」を放つことで、生徒が納得して「第2の矢」を受け入れることができるというお話は、「アウタールールとインナールール」のお話とも関連しているし、「授業と特別活動のオーバーラップ」というお話にもつながる考え方だと思いました。教師自身が多様な視点や柔軟な考え方ができると、生徒に「本質」を伝えることができるのだと思います。それは、「人生」であり「哲学」であり、「定義」であり「理論」であり、ある種の「法則」かもしれません。そこに生徒は惹きつけられるのだと思います。そのような教師が「魅力的な教師」で、威圧的な教師の対極にあるような気がします。